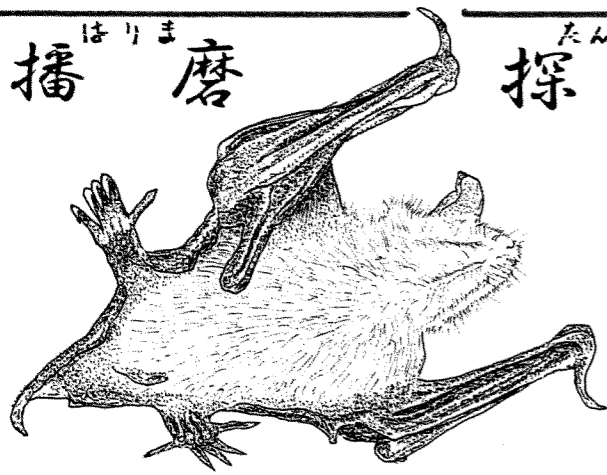
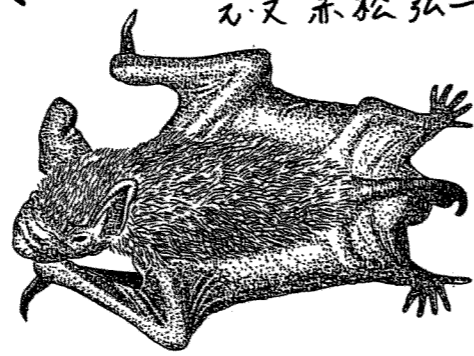


播磨探検



16年ぶりに発見されたコウモリの遺骸

探検



2003年7月 在りし日のちーちゃん

2019.10.21
289号
文 赤松弘一

8月末、自宅から「玄関の下駄箱の上の開き戸の奥にコウモリがへばりついている」との緊急連絡があった。「それはずっと以前に持ち帰って、紙箱に入れていたら逃げ出して行方不明になっていたコウモリじゃないか？」という「そんなはずないでしょう、もう10年以上前でしょう！」と、『ふざけるんじゃない』と言いたげな返答が帰ってきた。

いったいどこから侵入したのだろうと首をひねりつつ帰宅し脚立に上がって調べてみた。開き戸の中に青い靴箱がある。「こいつの後ろか…」箱をそっと退けると、そいつはいた。まさに行方不明になっていたコウモリに違いない、むろん生きてはいないが…

2003年7月25日、当時勤めていた魚住東中学校の体育館外側通路でバスケット部の生徒が見つけてきたコウモリの子どもを「写真を撮ってスケッチしよう」と、私は持ち帰ったのだ。撮影後に紙箱に入れて下駄箱の上に置いていたのだが、翌朝には姿が消えていた。

「ちーちゃんはいずこ！（その鳴き声から付けた名前）」そこら中を探したが見つからなかった。その頃玄関では60cm水槽でナマズを飼育していた。こいつは1999年に近所の用水路で捕獲したものが、当時すでに30cmを超える大きさになっていた。「コウモリはこいつの胃袋の中に入っているという可能性が非常に高い」下手人はナマズということで本件の捜査は打ち切られたのだ。このあたりの経緯は自著「播磨探検」に詳しい。

16年余りの歳月を経て、彼（オスでした）は発見された。お酒のおつまみの乾き物のような完全乾燥ミイラ状態であった。この16年間で私は勤務が中学校から小学校に変わり、テレビは薄くなるなど、いろんなことが変わった。それらを彼はじっと靴箱の裏で見ているのだ。このコウモリ騒動の前、2003年の冬には隣家の壁にコウモリがへばりついているのを見つけた。そいつは2006年まで夏も冬もじっとへばりついていた。なかなか粘り強い見上げたヤツと感心していたが、じつはそいつも死んで干物になってしがみついていたのである。これは自著「父と子のいきもの不思議探検」に顛末を記している。

ちなみにこれらはイエコウモリ（アブラコウモリ）であると思われる。夏の夕暮れに盛んに飛び交って、虫を食べているごく普通のコウモリである。夜行性なので夜は餌の昆虫を求めて飛び回り、昼間は家の屋根裏や洞窟なんかに潜んでいるようだ。

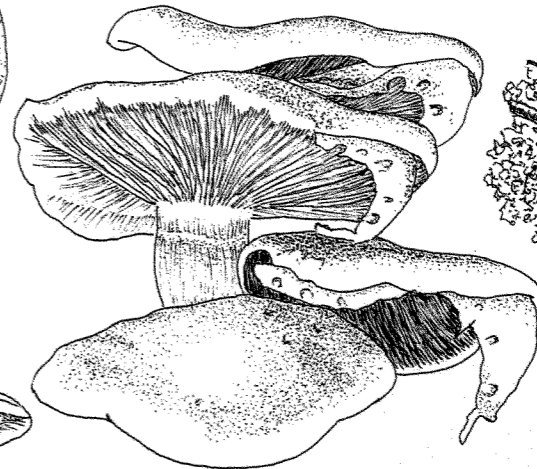
学校の渡り廊下には柱の隅に黒い米粒大のフンがたくさん落ちていますが、これはコウモリのフンである。昼間は姿を見せないが、夜にはここで休んでいるのだろうか。夜中に学校に来てみないとこの謎は分からない。

神様からのおくりもの ~御神木に生えたうまいキノコ~

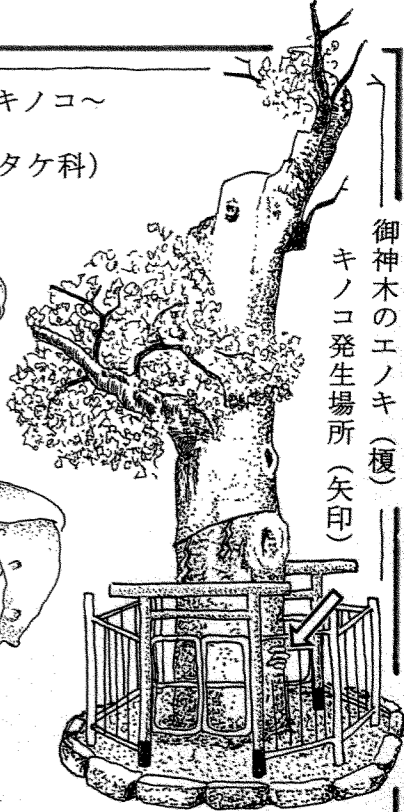


10円玉と比較
(でかい！)

ヤナギマツタケ (オキナタケ科)
Agrocybe cylindracea



断面は白く充実



御神木のエノキ(榎)
キノコ発生場所(矢印)

10月のある日、私は高砂市の自宅近くの神社へ秋祭りを見に行った。実際の目的はキノコ調査である。7年程前、この神社の御神木に大きなキノコが発生しているのを発見した。以後毎年のようにキノコは発生しているようなのだが、いつも私が訪れるタイミングが悪く、すでに黒く萎れていて、何のキノコなのか同定できずにいたのである。今年こそ！と意気込んで御神木に近づくと、キツネ色の大きな傘を広げたキノコが群生している。「やっと出会えた！こいつは絶対食べる」と思ったが、何しろご神木である。しかも祭りで人の眼も多く、採取するのはためらわれたので、やむなく撤退した。しかし長年キノコを追求してきた私はあきらめきれず、翌日再び神社を訪れた。丁度禰宜さんが祭りの片づけをしていたので、「キノコを研究しているのですが…」と事情を話したところ、採取を許可してくれた（私がこの神社が経営する保育園のOBであり、且つ6年前に神社の祭りの神事で大役を果たしたことも大きなポイントになった）。そこで、写真を撮ってから5本の株の中から2本を採取した。

このキノコはヤナギマツタケであると思われる。明石公園でアキニレの大木の根元に発生したものを採取し食べたことがある。時には街路樹に大きな株が発生して新聞に載ったりもする。今回採取したものは傘の直径が約20cm、柄は太さが5cm以上あった。図鑑で見たものよりかなり柄が太い。さっそく細切りにしてゴーヤとミミガー（豚の耳ですな）と共に炒めて食した。歯切れがよく味は淡白で非常にうまかった。中毒症状もなかったので、翌日は鳥なべに多量に入れて食べたが、シャキシャキした食感が絶品であった。普段私が持ち帰るキノコに疑念を持ち、手を付けない家人も納得のキノコであった。

ヤナギマツタケはオキナタケ科で、キシメジ科のマツタケとは関係はない。柳の木に生えるうまいキノコなのでヤナギマツタケというらしい。この御神木は、かつてこの保育園児であった私が毎日見上げていた（かどうかわからないが）エノキの大木であるが、もはや幹は朽ちてほぼ全体がキノコの菌糸に侵されており、かろうじて太い枝一本に葉を茂らせるのみである。永遠に続くかに思われる巨木の命が尽きようとしている。気が付くと過ぎ去った半世紀を振り返って、昔日の思い出を懐かしむ私が出た。ちょっと文学風。